

回想記解題

国谷哲資「北京追憶——若者が体験した戦後日中関係秘史——」

飯塚 靖

国谷哲資氏は、1932年4月に鳥取県に生まれ、37年より両親と3人で満洲国の首都新京で暮らした。父親は満洲国の経済部に勤務していた。45年8月、同氏が中学1年生の時にソ連軍が満洲に侵攻し、一家は満洲国政府関係者と共に引揚げ列車に乗った。ただ安東において父親の病状が悪化し、親子3人同地にとどまることを余儀なくされた。まもなくして父親が死去し、安東において母子2人となってしまった。国谷氏の母親は、戦後満洲の混乱の中を母子共々生き抜くために、中国共産党軍の被服廠で働くことを選択し、その後母子は被服廠の移動に伴い、東北各地を転々とした。その後、国谷氏は、49年9月から52年末まで鶴崗炭鉱での労働に従事し、瀋陽での「民主新聞社」（日本人向けの新聞の発行）勤務を経て、1953年には北京に移動し、日本共産党の非公然指導部である北京機関に勤務した。さらに、中国人民大学に学び、文革を体験し、1967年に母子で帰国した。帰国後は、下関市に在住して、一貫して日本共産党（左派）の活動に従事した。本回想記は、先の回想記（国谷哲資、2015）では伏せていた部分について、新たに語ってもらったものである。すなわちそれは、先の回想記では公にすることをためらわれていたことであり、1950年代から60年代にかけてのご自身の日本共産党員としての北京での体験である。

本回想記は国谷氏と筆者との語りの中で生み出されたものである。筆者の問いかけに対して、国谷氏が過去の記憶を呼び覚ましながら語り、それを録音し、筆者が文字に起こした。あるいは、国谷氏自身が手書きで文章にまとめ、それを文字に起こし、さらに質疑応答を繰り返し、内容を確定していくという方法もとった。こうして完成したものが本回想記であり、いわば2人の共同作業の成果であると言える。その作業は2018年2月より同年12月

まで、ほぼ毎月 1 回のペースで繰り返された。国谷氏は 80 歳代後半の高齢にもかかわらず、大変ご壮健であり、なによりも記憶力が抜群であった。筆者の問いに対して、半世紀以上前の体験が人物名を含めてリアルに語られた。そうした過去の記憶が鮮明であることの理由には、氏は帰国後も中国での体験に強い関心を持ち続け、日本で関連する図書が出版されるとそれを読み、メモ・ノートを綴られていたということもある。

この国谷氏との語らひは、戦前・戦後の日中関係史の謎に迫る知的好奇心にあふれたものであった。そこに登場する人々は、筆者にとってはもはや歴史上の人物とも言える徳田球一、野坂参三、袴田里見、西沢隆二（ぬやま・ひろし）、高倉テル、大塚有章などであり、また横川次郎、川越敏孝、岡田文吉、鈴木重歳、高野広海^{ひろみ}など戦前から中国と深く関係しながらその存在が広くは知られていない人物もいた。さらに、北京機関の実態、1960 年代前半の日中両共産党の蜜月関係、白鳥事件関係者の文革期の動向、北京空港事件なども、興味をそそられる内容であった。国谷氏との対話の中で、そうした人物や出来事に強い関心を抱くと同時に、様々な疑問が生じて、より深い探求の必要を痛感した。筆者はそうした疑問を解決すべく、国立国会図書館などに通い、資料収集と事実の掘り起こしにつとめた。また、情報の共有のために、収集した資料を国谷氏にも提供し、お読みいただいた。そうして集めた資料は下記の参考文献に示し、また知り得た事実の一端は以下に述べるとともに、回想記に注記した。なお、回想記の注記はすべて飯塚によるものである。

筆者は戦後の中国東北部（旧満洲）における日本人の残留及び留用を研究テーマとしており、国谷氏の回想記で着目する点は、1950 年代の北京において、日本共産党の非公然組織・北京機関の指導により「自由日本放送」や「党学校」なるものが組織され、そこに多くの満洲残留者・留用者が留め置かれた事実である。国共内戦下で中国共産党に協力し旧満洲に残留した若者たちが、アジア冷戦の深刻化の中、ソ連・中国・日本の共産党の連携の下、日本革命の幹部要員となるべく北京でのさらなる残留を余儀なくされたのである。

北京機関について日本共産党は、党史『日本共産党の七十年』の中で、事実関係を次のように総括している。すなわち、『北京機関』は、徳田・野坂

分派ら亡命者集団であり、分派の国外指導部となり、党の分裂を決定的なものにするるとともに、中国流の武装闘争方式を日本にもちこむなど、覇権主義的な干渉の重要な道具となった。『北京機関』は政治的にも、財政的にもソ連、中国両共産党の支配下にあり、党規約に反する分派の機関であり、その活動と主張のいっさいを、党の歴史のうえで認められない存在であった」と。このように日本共産党は、北京機関は徳田・野坂の分派が行ったことであり自分たちとは関係ないと立場であるが、北京機関の存在は認めているのである。さらに党史によれば、自由日本放送は52年5月1日から開始され55年12月に閉鎖、党学校は54年1月に開校され57年3月に閉鎖されたとある。党学校は当初は軍事学校として計画されたが、その後の内外情勢の変動により軍事教育は行われず、ソ連共産党史、中国革命史、日本問題、哲学、経済学などが教えられ、その人員は千数百人から二千人に達する大規模なものであったとされる。ただ、党史では、党学校の学生や関係者のほとんどが、旧満洲での残留を余儀なくされた若者たちであることの説明がない。

国谷回想記にあるように、自由日本放送は最盛時でも80人ほどに過ぎなかったが、上記のように党学校には膨大な数の満洲残留者・留用者が留め置かれたのである。なお、『週刊朝日』（1980年10月24日）の記事では、1958年4月から7月までの引揚げ者総数2153人、その約7割が党学校関係者であり、総数1500人としている。また、同年7月の引揚船最終便には、日本からの密出国組65名が乗船していたともしている。

北京機関については、日本共産党の幹部であった袴田里見や伊藤律などの証言もあり（袴田里見、1978、伊藤律、1993）、自由日本放送については初期にその業務を主導した藤井冠次の証言もある（藤井冠次、1980）。また、党学校については、『サンデー毎日特別号』（1961年3月）や『週刊朝日』（1980年10月24日）でも詳しく報道されているが、当事者による回想は少ない。ただ、東京大学を卒業直後、密出国して党学校で助教となった犬丸義一は、歴史家の責務を感じてか、自分の出国の経緯や党学校での体験について、晩年に貴重な証言を残している。犬丸によれば、1953年3月に中国に密出国したが、最初に送り込まれたのは河北省邯鄲郡永年県であり、校門の看板は「河北軍官学校」であり、日本人学生は千人余りいたとされる。そして、日

本から亡命した者は少数であり、中国の解放戦争に参加した人々が大半であったとしている（犬丸義一、2002、2010）。この永年県の「学校」は、日本共産党の党史では触れられていない部分であり、当初はここに中共軍に協力した日本人若者を結集させ、軍事訓練を施し、日本に送り込もうと計画されたものであろう。この永年県の「学校」については、国谷回想記でも母親が保母として送り込まれたと証言されている。

この永年県の「学校」については、前田光繁（仮名・杉本一夫）などの証言もある（山下正男ほか、2009）。永年県の施設には、閻錫山の山西軍に協力し中共軍の捕虜となった元日本兵が収容された。その後、山西軍関係者は、1950年12月に将校などが太原戦犯管理所に移管され、一般兵士や下級将校は52年5月に北京郊外の西陵に送られた。そして、前田光繁は53年春に永年県に行き、この施設を利用したとする。前田はこの「学校」について、「もともと解放軍に協力していた日本人の中で、もっと勉強したいという希望者を集めて学校を作ったわけです。それが永年に作られたんです」としている。なお、この後、前田は北京の「マルクス・レーニン主義学院第2分校」に行き、1957年の学院終了まで教務副主任を務めたとされる（前田光繁、2016）。

前述の『サンデー毎日特別号』（1961年3月）によれば、「党学校」は、北京西南郊外の長辛店に所在し、敷地は90万平方メートルと広大であり、施設は同校開校のために新築された恒久設備であり、宿舎、大食堂、大講堂、総合病院、浴場、売店など生活に必要なものがほぼ完備されていた。ただ、赤レンガと鉄条網に囲まれた周囲を常に中国兵が監視しており、学生は一步も外に出られなかった。学生は男女合わせて約1500人であり、さらに夫婦学生の子供たち300人もおり、その他教授陣や中国人従業員をあわせると約2000人が暮らしていたとされる。

党学校は、「日本共産党中央党学校」、「中国人民大学第二分校」、「馬列学院」（馬はマルクス、列はレーニンの意味）、「マルクス・レーニン主義学院第2分校」、「マルクス・レーニン学院」、「マレー学院」など様々な名称で呼ばれており、正式名称は不明である。この点に関して、小林陽吉は父親・小林清（日本人反戦兵士、戦後東北で活動）を紹介する文章の中で、この党学校を「マルクス・レーニン主義学院第2分院」と呼び、第1分院は東南アジア各

国の革命同志のためのものであったとしている。また、「分院」は中国共産党中央マルクス・レーニン主義学院（1949～55年）に所属しており、本学院は後には中国共産党中央高級党学校（1955～66年）と改称され、1966年以後は中国共産党中央党校となったとしている。また「第2分院」で学び日本に帰国した同志は、「中国人民大学卒業」と名乗ったとしている（小林陽吉、2006）。おそらくこれが中国共産党側から見た党学校の位置づけであろう。すなわち、党学校は中共中央のマルクス・レーニン主義学院の分院であり、そのために「マレー学院」などと略称されたものであろう。また、東南アジア諸国の共産党向けの「第1分院」が存在していた可能性も高い。「中国人民大学分校」は、その存在を偽装するための呼称であろう。

北京機関の幹部は、「人民艦隊組」から構成された。「人民艦隊」とは、1950年に非合法化され武装闘争路線に転換した日本共産党が、党員を中国や北朝鮮に密航させるために編成した小型漁船からなる密航船群である。本回想記にも登場する岡田文吉がその責任者とされた。この密航船により北京に渡った人々が「人民艦隊組」である。密航には中国当局の支援があるとは言え、密出国は容易ではなく、「人民艦隊組」の人数はそれほど多くはなく、党学校を含めた北京機関の人員は圧倒的多数が「東北組」で占められていた。「東北組」とは、国共内戦下の中国東北部で、中国共産党に協力し、兵士、医療関係（医師・看護婦・衛生兵）、炭鉱・工場・鉄道等の労働者などとして勤務した人々である。このように日本人を帰国させずに使役したことを中国側では「留用」と呼ぶ。兵士・労働者として勤務した者は比較的若い人が多く、満蒙開拓青少年義勇軍が重要な供給源であったと考えられる。看護婦は満洲国の医療機関や関東軍などに所属する現役看護婦も留用されたが、10代から20代の一般家庭の子女が中共側の要求に応じるために残留を余儀なくされた場合も多かった。さらには、技術者・研究者・大学教授などのインテリ層も多数留用された。

中国東北部で、留用日本人の指導と政治教育にあたったものが、日本人「民族幹事」である。それは「現地派」と「外来派」に分かれ、前者は主として、戦前日本で共産党などの活動に参加し検挙・投獄され、保釈後に満洲に渡り、満鉄調査部、満洲映画協会、合作社（農業協同組合）などに職を得た人々で

あった。太平洋戦争時期には、彼らの多くは合作社事件、満鉄調査部事件として、満洲国での共産主義運動の嫌疑で逮捕・投獄された。本回想記で語られる大塚有章（満洲映画協会勤務、仮名・毛利英一）、井上林（合作社事件で逮捕・投獄）、横川次郎（満鉄調査部事件で逮捕・投獄）、石田精一（満鉄調査部事件で逮捕・投獄）、三村亮一（満洲映画協会勤務、仮名・池田亮一）がそれにあたる。一方、外来派民族幹事とは、日中戦争下で中共軍の捕虜となり、思想改造を経て中共軍に協力することとなった元日本兵である。戦後その大部分は帰国したが、百余人が東北地方や関内に残って中共側に協力したとされる（飯塚靖、2018）。本回想記で登場する和田真一（本名・山室茂）がそれにあたり、前述の前田光繁はそうした民族幹事のリーダー的存在であった。ただ、こうした民族幹事の戦後東北での活動に関する証言はきわめて少なく、その活動の実態は不明であり、今後の研究課題となっている。

国谷氏の人生に影響を与えた大塚有章（1897－1979）についても、戦後中国での活動の詳細は未だ明確ではない。ここでは主に『新中国に貢献した日本人たち』を参考にして、彼の履歴を簡単に紹介しよう。大塚は、山口県玖珂郡岩国町に生まれ、1920年早稲田大学政治経済学部卒、姉が河上肇に嫁いでおり、河上の影響で左翼運動に身を投じた。32年日本共産党入党、同年10月赤色ギャング事件（東京大森の川崎第百銀行を襲撃しピストルで行員を脅して3万円を強奪）の実行責任者となり、翌年逮捕され、10年の有罪判決を受け服役。42年に満期釈放となり渡満し、満洲映画協会上映部巡映課長に就任。戦後、長春において10名余りの「日本共産主義者グループ」を組織し、毛利英一の偽名を名乗り、中国共産党に協力して日本人工作を展開することになる。46年9月、鶴崗炭鉱に派遣され、同炭鉱日本人労働組合の委員長となる。同炭鉱には1500名余りの日本人がおり、彼らに思想教育を実施して、中共の石炭増産政策に協力させることが任務であった。そのために、日本人若者の積極分子を「東北建設突撃隊」に組織していった。彼の指導の下、同隊は拡大し、鶴崗炭鉱での石炭増産に日本人が大きく貢献することとなった。48年11月には瀋陽に転属し、東北人民政府工業部日本人従業員科長となり、49年2月には鞍山鋼鉄会社に転属。50年には、東北人民政府日本人管理委員会の宣伝局科長となり、「民主新聞社」の副社長を兼務。53年以降は、中

国政府が指導した日本人帰国支援の仕事に従事し、56年8月、天津から帰国した。国谷氏はこの鶴崗炭鉱で働き、東北建設突撃隊に加入し、日本革命を志すようになり、大塚有章の誘いで瀋陽の「民主新聞社」に入社したのである。

北京機関及びその傘下の自由日本放送及び党学校には、旧満洲出身の多くの若者が関係したが、引揚げ時に緘口令が敷かれたためか、多くの関係者は沈黙を守った。自由日本放送終了後、そこに所属していた若者たちは党学校に行かされ、党学校関係者は1957年3月の同校解散後、同校所属の事実を隠蔽するために、中国各地の機関に転属させられ、そこで1年余りの時間を過ごし、58年になってやっと帰国できた。自由日本放送や党学校の出身者が、戦後の日本でどのような人生を歩んだのか、これも今後の研究課題である。

本回想記で国谷氏は、党学校で学んだ者のうち、帰国後には日本共産党と決別した者も少なくないとしている。前述の『サンデー毎日特別号』（1961年3月）でも、帰国後2年半を過ぎて日本共産党に入党したのは1500名のうち約300人位としており、比率としては高くない。ただ、後に日本共産党参議院議員となった立木洋も党学校で学んだとされており、一定程度の人々は日本共産党の幹部や活動家として帰国後の人生を歩んだのではないかと推察される。また、党学校には中国語班とロシア語班も設けられており、中国語能力を生かして貿易商社や日中友好団体に勤務した人々も存在したと考えられる。すなわち、当初の目的とは異なり、党学校が戦後日中交流の人材供給源の一つとなったのではないかということである。日中交流に従事した人々の回想録の経歴欄を見ると、「北京にて学習」、「人民大学に学ぶ」などの記載が散見され、「党学校」関係者と推測できる人々がかなり存在しているのである。ただ、1953年から58年の5年余りも前途有為の若者をこれほど大量に中国に残す必要があったのか、これは大きな疑問である。

本回想記により、川越敏孝（1921－2004）、鈴木重歳（1908－1975）、横川次郎（1901－1989）が北京機関に勤務していた事実が確認できた。この3名は、戦後東北での留用を経て、人民共和国建国後も中国に残留し、「専門家」（専門家）として中国側に協力した人々である。川越と横川は外文出版社に勤務し、鈴木は妻の児玉綾子と共に北京大学東方言語学部日本語学科で教鞭

をとった。この3名は長く中国に滞在し、北京で死去している。彼らは、『新中国に貢献した日本人たち』において、その貢献が顕彰されているが、同書では北京機関での活動については秘匿されている。横川は中国語で回想録を残しているが、北京機関に所属していた事実は隠されている(横川次郎著・陸汝富訳、1991)。川越に関しては、小池晴子によるインタビューがあり、そこで川越は自由日本放送に勤務していた事実を語っている(小池晴子、2009)。また、川越は晩年に自己の足跡を記した詳細な記録を執筆しており、それが娘さん夫婦によりまとめられ、『回想—戦中・戦後の日中を生きて』と題して公刊された。そこでは、北京機関と自由日本放送の実際の状況が詳しく語られている。国谷氏は、川越及びその娘さんご夫婦との交流があり、川越の回想録が出版されたことが、氏に本回想記を執筆・公表する一つのきっかけを与えたものであろう。

鈴木重歳が北京機関に勤務していた事実も、これまで知られていなかった。鈴木は死別した前妻・芳子は河上肇の娘であり、鈴木は河上肇の娘婿であった。芳子は1949年10月に大連にて病死したが、その前後の鈴木重歳の日記が残されており、草川八重子はその日記を用いて、妻の看病の様子、死去後の妻を偲ぶ鈴木的心情を文章にまとめている(草川八重子、2010～2014)。だが、そこでは鈴木が北京機関に勤務していた事実は把握されていない。また、鈴木は友人である内海庫一郎は、妻の児玉綾子に鈴木が北京大学に移るまで北京で何をしていたのかを尋ねているが、「中国の党中央の関係で働いていた」との回答であり(内海庫一郎、2011)、児玉は北京機関の存在を秘匿していたようである。

本回想記では、1955年12月の自由日本放送の閉鎖後の北京機関の実態についても詳しく語られている。袴田里見をリーダーとした組織が57年夏までは存続し、袴田はソ連人の男女各1名の秘書を付けていた。ここでの疑問は、袴田がなぜこのように長期間北京に残り、ソ連人秘書まで付けていたかである。あるいは、ソ連・中国側から日本共産党への資金援助の窓口役を袴田が担っており、そのために北京に留まっていたということかも知れない。

なお、本回想記では、神戸華僑の出身で1950年代に中国に渡り、日本共産党員として中国共産党側との連絡役をしていた「羅明」なる人物が登場す

るが、この人物が 67 年の国谷氏の帰国以後どのような人生を歩んだのかについては、国谷氏は全く不明であるとしており、謎として残る。

国谷氏は 1959 年 9 月に中国人民大学に入学し、65 年 7 月に同大学を卒業した。当時の人民大学は 5 年制であったが、氏は病気のために 1 年間休学し、卒業までに 6 年間かかっている。本回想記で語られる 1960 年代前半の北京の日本人社会の様子も興味深い内容である。国谷氏や川越敏孝など北京機関を経てその後も中国に留まった人々は、日本共産党北京細胞に所属していた。他に日本人としては、日中両共産党の蜜月関係の中で、日本共産党幹部の家族が多数北京で暮らし、また多くの専門家や日本語教師、留学生などが日本共産党により派遣され、新僑飯店には友好貿易に従事する商社員が多数駐在していた。北京語言学院には中国語の習得のために中央幹部の子弟が送り込まれ、北京体育学院では新興勢力の運動会の代表となるべく党員のスポーツ選手が汗を流していた。そうした北京在住日本人の慰労のために、西園寺公一^{きんかず}は新僑飯店において日本映画の観賞会を開催していた。また、中国人民大学の学生であった国谷氏は、西園寺の長男・一晃との交流があり、何回か西園寺邸を訪ねている。ただ、こうした北京在住の日本人たちは、文化大革命が勃発すると、日本共産党を支持するのか、それとも中国共産党を選ぶのか、厳しい二者択一を迫られることになった。

1965 年 8 月に国谷氏は、日本共産党の北京代表として派遣されてきた砂間一良^{いちろう}の秘書兼通訳となった。そして翌 66 年 2 月には、日本共産党 3 カ国訪問団の中国語通訳としてベトナムに向かい、また中国での日中両共産党の会談決裂の過程もつづさに目撃している。その直後、文化大革命が発動されるが、国谷氏は文革を支持し、砂間のもとを離れ、日本共産党からも除名されている。また、北京在住の日本人留学生は、文革支持派と日本共産党支持派に分裂し、北京体育学院では暴力事件も発生している（『毎日新聞』1966 年 11 月 5 日）。こうして、文革及び毛沢東路線を支持して北京に残った日本人たちは、1967 年 8 月、砂間一良と紺野純一（赤旗特派員）の帰国に際して、「北京空港事件」と呼ばれる暴力事件に関係することとなった。

以上のように、本回想記は、満洲出身の一青年が北京での体験をありのままに綴ったということで、大変貴重な内容である。まだ、国谷氏は若かった

ので、日中両共産党の関係の内奥までは知る立場にはなかったであろうが、国谷氏の体験や見聞は、戦後日中両共産党関係史を考察する上で様々な示唆に富んでいることは間違いない。

<関連文献>

◎中国残留者・留用者

- ・古川万太郎『中国残留日本兵の記録』（岩波書店、1994年）
- ・藤原彰・姫田光義編『日中戦争下における日本人の反戦活動』（青木書店、1999年）
- ・NHK「留用された日本人」取材班『「留用」された日本人 私たちは中国建国を支えた』（NHK出版、2003年）
- ・中国中日関係史学会編・武吉次朗訳『新中国に貢献した日本人たち』（日本僑報社、2003年）
- ・鹿錫俊「東北解放軍医療隊で活躍した日本人—ある軍医院の軌跡から」（島根県立大学北東アジア地域研究センター『北東アジア研究』第6号、2004年1月）
- ・中国中日関係史学会編・武吉次朗訳『統新中国に貢献した日本人たち』（日本僑報社、2005年）
- ・朱建榮『中国で尊敬される日本人たち』（中経出版、2010年）
- ・堀井弘一郎『「満州」から集団連行された鉄道技術者たち—天水「留用」千日の記録』（創土社、2015年）
- ・飯塚靖「戦後中国東北地区における日本人留用技術者の諸相—資料『中共事情』より探る—」（大阪経済大学日本経済史研究所『経済史研究』第20号、2017年1月）
- ・飯塚靖「ハルビンにおける残留日本人と民族幹事—石川正義の逮捕・投獄と死」（梅村卓・大野太幹・泉谷陽子編『満洲の戦後—継承・再生・新生の地域史』勉誠出版、2018年）

◎個人伝記・回想など

- ・中西功『中国革命の嵐の中で』（青木書店、1974年）

- ・横川次郎著・陸汝富訳『我走過的崎嶇小路—横川次郎回憶錄』（新世界出版社、1991年）
- ・楊国光『ある台湾人の軌跡—楊春松とその時代』（露満堂、1999年）
- ・本田善彦『日・中・台 見えざる絆 中国首脳通訳のみた外交秘録』（日本経済新聞社、2006年）
- ・小池晴子『中国に生きた外国人 不思議ホテル北京友誼賓館』（径書房、2009年）
- ・内海庫一郎「鈴木重歳の思い出」（『河上肇記念会会報』No.100、2011年8月）
- ・草川八重子「妻恋の記—記録・鈴木 重歳—」（1）～（11）（『河上肇記念会会報』No.97～No.107、2010年9月～2014年1月）
- ・川越敏孝『回想—戦中・戦後の日中を生きて』（岩波ブックセンター、2015年）
- ・国谷哲資「激動中国に青春を生きる—留用と学校で学んだ人生観—」（広島中国近代史研究会編『拓蹊』第2号、2015年7月）
- ・前田光繁「講演原稿」関西日中平和友好会「第一号反戦日本兵士前田光繁100歳の証言」講演会、2016年9月24日、kansai-jcpfa.jp/cp-bin/wordpress/wp-content/uploads/2017/06/20160924kouen.pdf 2019年1月28日閲覧。
- ・南村志郎著、川村範行・西村秀樹編『日中外交の黒衣六十年—三木親書を託された日本人の回想録—』（ゆいぽおと、2018年）
- ・安斎庫治述・竹中憲一編『安斎庫治聞き書き 日本と中国のあいだで』（皓星社、2018年）

◎日本共産党関係

- ・「北京で暴力沙汰 紅衛兵運動 日本の留学生分裂 日共支持派つぎつぎ帰国」（『毎日新聞』1966年11月5日、夕刊6面）
- ・国谷哲資「反中国・反革命の陰謀 砂間、紺野の罪状 国谷氏元砂間の「秘書」が暴露」（『長周新聞』1967年8月20日、1面・2面）
- ・思想運動研究所編『日本共産党本部：ここで何が行われているか』（全貌社、

1967年)

- ・亀山幸三『戦後日本共産党の二重帳簿』（現代評論社、1978年）
- ・小林峻一・加藤昭『闇の男 野坂参三の百年』（文藝春秋、1993年）
- ・小島優編『日中両党会談始末記—共同コミュニケはどうして破棄されたか（増補版）』（新日本出版社、1996年）
- ・不破哲三『日本共産党にたいする干渉と内通の記録—ソ連共産党秘密文書から—』上・下（新日本出版社、1993年）
- ・日本共産党中央委員会『日本共産党の七十年』上（新日本出版社、1994年）
- ・和田春樹『歴史としての野坂参三』（平凡社、1996年）
- ・兵本達吉『日本共産党の戦後秘史』（産経新聞出版、2005年）
- ・不破哲三『スターリン秘史—巨悪の成立と展開 第6巻 戦後の世界で』（新日本出版社、2016年）
- ・不破哲三『新版たたかひの記録—三つの覇権主義』（新日本出版社、2017年）

◎党学校

- ・「日共の革命教育はこうして行われた 元学生が語る北京『馬列学院』の全貌」（『サンデー毎日特別号』1961年3月）
- ・「1500人を擁したもう一つの『北京機関』の知られざる実態」（『週刊朝日』1980年10月24日）
- ・犬丸義一「私の戦後と歴史学」（『年報日本現代史』第8号、2002年）
- ・小林陽吉「父親十二 生活的別一面」2006年7月28日
<http://www.dongyangjing.com/displ.cgi?zno=10046&&kno=002&&no=0012> 2019年1月29日閲覧
- ・山下正男・仙波藤呉・小俣佐夫郎・前田光繁「座談会 永年・西陵で暮らして」（季刊『中帰連』45号、2009年1月）
- ・「歴史家、犬丸義一会員に聞く—中国密航から文化大革命まで—」（『アジア・アフリカ研究』第396号、2010年4月）
- ・「永年収容所での日々 中国での体験を通して～前畑信男さんインタビュー」（季刊『中帰連』54号、2014年4月）

◎北京機関

- ・袴田里見『私の戦後史』（朝日新聞社、1978年）
- ・藤井冠次『伊藤律と北京・徳田機関』（三一書房、1980年）
- ・渡部富哉『偽りの烙印—伊藤律・スパイ説の崩壊—』（五月書房、1993年）
- ・伊藤律『伊藤律回想録—北京幽閉二七年』（文藝春秋、1993年）

◎四川組

- ・川口孝夫『流されて蜀の国へ』（私家版、1998年）
- ・後藤篤志『亡命者：白鳥警部射殺事件の闇』（筑摩書房、2013年）